

藤並の森

Vol.39



▲上野寛永寺・葵の間にて座する宮尾登美子さん(アシェット婦人画報社提供 写真／細谷秀樹)

「満足した」「感激した」「感銘を受けた」「とにかくすごかつた」こんな言葉の数々が、アンケート用紙の上に踊った。本年度の特別企画展「宮尾登美子展・『天璋院篤姫』を描いた作家」は、四千人を超す観覧者を得て、十一月五日好評のうちに終了した。

今回の展示資料は、宮尾登美子さんの直筆原稿や創作資料、愛用品など、実に百八十点。そのほとんどが、高知県立文学館からお借りしたものである。

宮尾さんの作家としての軌跡と珠玉の作品群等を紹介した展示会場には、華やかな雰囲気の中にも、凜とした空気が漂っていた。「権」「仁淀川」など自伝的四部作の草稿、創作ノートや直木賞受賞作「二絃の琴」の草稿等に、訪れた人々は一心に魅入った。

中でも、最も注目を集めたのは小説「天璋院篤姫」の草稿であった。鹿児島では、NHK大河ドラマ「篤姫」の放映決定以来、その原作本、並びに作者である宮尾登美子さんへの関心も、少なからず高まっていた。そして、歴史に埋もれた薩摩の女性「篤姫」を、魅力溢れる人物として浮き彫りにした作家へ、好意の眼差しが向けられていた。

リレー随筆

「協力、提携に感謝」――丸内 浩明

まるうち ひろあき

「満足した」「感激した」「感銘を受けた」「とにかくすごかつた」こんな言葉の数々が、後押したのであった。

遡って、今回の特別企画展開催の恰度一年前、私は高知県立文学館をお訪ねした。正式な資料借受け依頼であつた。館長さんと主任学芸員さんの鄭重な応対を受け、私の心は和んだ。

話題が進む中で、「収蔵する宮尾登美子関連資料は約六百点であること」「昨年暮れに寄贈されたばかりであること」「受入れ処理が全部すんでないこと」などを聞きした。私はそれらの説明を拝聴しながら、恐縮の度合いを増していくた。

「逆な立場で、自館だつたら資料貸出しに踏み切れただろうか」と。しかし、私の動搖を見透かしてか、すかさず「宮尾文学の資料研究や展示の在り方など、館相互で研究を深める機会にしていただけたら……」と、有難い慰めのお言葉を頂戴した。

その後企画展まで、両館学芸員同士の数回の行き来があつた。相互の研究は展示構成にも生かされ、「共催」の形を採ることとなつた。

収蔵資料が充分でなければ、興味深い文学展を催すことはできない。文学館相互の協力、提携関係の確立、その大切さを今回改めて実感させられた。

(かごしま近代文学館 館長)

展覽會紹介
Exhibition

「天璋院篤姫と宮尾文学」展

平成20年
1月2日(水)
▼
3月9日(日)
企画展示室
観覧料550円

「天璋院篤姫と宮尾文学」展への誘い

直木賞作家で、現在も多くのファンを魅了し続いている郷土出身の作家 宮尾登美子さん。

高知県立文学館では、宮尾さんより寄

贈いただいた『天璋院篤姫』の直筆原稿などを中心に、宮尾文学の世界をご紹介。史実を背景に、宮尾さんが描く「篤姫」の魅力に迫ります。

「一日に七たび色がかかるという桜島の姿を、寅刻に仰ぐのは今日が初めてで、そしておそらくこれが最後になるであろうと、篤姫は思いつつ、老女の幾島に手を取られて庭に下りた。」

宮尾登美子作『天璋院篤姫』の書き出し部分。優美な桜島の描写とともに島津斉彬(第一八代薩摩藩主)の養女として、将軍家に嫁ぐ篤姫の様子が流麗な文体で紹介されている。

宮尾さんの文章は、非常に美しく、心に染み入ってくる。まるで、映画の一場面を見ているかのように、一瞬にしてその情景を浮かびあがらせる。

たとえば、太宰治賞を受賞した「權」を見ても、書き出しに見られる土佐の日常の風景と富田家にとって特別な意味をもつ「楊梅売り」が登場する。その土地、土地の風土や情景の中に主人公を登場させ、後の物語の展開を暗示させている。



『天璋院篤姫』。女性の生き様を描き続けてきた宮尾さんが、初めて書いた歴史小説。一九八四(昭和五九)年講談社から出版されており、五七歳の時の作品である。

篤姫(天璋院)は、一八三五(天保六)年薩摩の分家(御一門四家)である今和泉家島津忠剛の長女として生まれ、幼少の頃は、「於一(おかつ)」(嫡流系図)、「二子(かつこ)」(公資料)と呼ばれていた。しかし、一九歳の頃までの篤姫についての資料は残されていない。(私も実際鹿児島で調査にあたつてみたが、残念ながら皆無であった。)その姫に転機が訪れる。

一八五三(嘉永六)年藩主斉彬の養女に迎え入れられ、徳川家定の妻となるために住み慣れた薩摩を離れ、京都の近衛家を経由して江戸にたどり着いたが、政治的状況のもと江戸の島津藩邸に足止めを食らい、三年間は、大奥で

▶諸家様御歌御手鑑「あきの野」より 島津斉彬御歌
財団法人 土佐山内家宝物資料館所蔵



生きていくための、書、和歌、香道を始め教養をつけるため花嫁修業の期間。繼いだのは家茂であり、天璋院は嫡母となり、京都から皇女和宮を迎える。この降嫁により、大奥では、となり「敬子(すみこ)」と名を改め、江戸と御所を巡つて軋轢が生じる。

会
見
展
紹
介
Exhibition

「天璋院篤姫と宮尾文学」展



平成20年
1月2日(水)

▼
3月9日(日)
企画展示室
観覧料550円



▲ 和宮肖像写真／財団法人 德川記念財団所蔵

しかし、天璋院は徳川家の女性として意地を貫き、大奥三千人を見事に統帥し、徳川家の存亡のこの時期、大奥から一人の脱落者も出さずに維新を迎えるのである。

複雑な社会情勢の中で、沈着、冷静、豪胆といわれた天璋院の内面の苦悩が丹念な筆致で綴られており、非常に興味深い。『天璋院篤姫』の醍醐味はここにも見られる。

⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①
余生 動乱 降嫁 繼嗣 (承前) 出立 入輿

(学芸課／津田加須子)

今回の展覧会では、時代背景をふまえながら、左記の内容で宮尾登美子作『天璋院篤姫』の魅力に迫る。是非、ご覧いただきたい。

[展示内容]

◆「天璋院篤姫と宮尾文学」展関連企画のご案内◆

■NHK大河ドラマ「篤姫」時代考証担当者 来高! 講演会開催

開催日：平成20年2月3日(日)午後2時～3時30分

場所：文学館1階ホール 定員：100名

演題：「篤姫の生き方—土佐と薩摩」

講師：原口泉氏（現在、鹿児島大学生涯学習教育研究センター長、鹿児島大学法文学部教授、NHK大河ドラマ「翔ぶが如く」「琉球の風」などの時代考証もなさっています。）

参加料：当日観覧券が必要です。（但し、2割引）（事前に電話でお申し込みください。）

■「土佐弁かるた大会」

☆入賞者には、すてきなプレゼントがあります。

開催日：平成20年1月2日(水)、3日(木) 各日とも午後1時30分～3時

場所：文学館1階こどものぶんがく室

参加料：当日観覧券が必要です。（当日、会場に直接お越しください。）

■朗読の会「天璋院篤姫」を楽しむ

開催日：平成20年1月19日(土)午後2時～4時

場所：文学館1階ホール 定員：100名

参加料：無料（当日、会場に直接お越しください。）

※文学館カルチャーサポーターのみなさんによる朗読です。

■いにしえの音楽～雅楽とともに

開催日：平成20年2月17日(日)午後2時～3時

場所：文学館1階ホール 定員：60名

参加料：当日観覧券が必要です。

（事前に電話でお申し込みください。）

※「繁藤雅陽会」のみなさんの演奏でお楽しみいただきます。

■福よ来い!! 紋切りあそび～日本の形で遊ぼう!

開催日：平成20年1月5日(土)・6日(日)、2月10日(日)・11日(月)

各日とも午後2時～4時

場所：文学館1階ホール

参加料：当日観覧券が必要です。（当日、会場に直接お越しください。）

※折って型紙に合わせて切る！江戸時代の遊びです！

■江戸からの伝統・折り雛まつり

開催日：平成20年3月1日(土)・2日(日)

各日とも午後2時～4時

場所：文学館1階ホール

参加料：当日観覧券が必要です。

（当日、会場に直接お越しください。）

※折り紙でかわいい雛人形が簡単に作れます。

☆展示解説

平成20年1月5日(土)・19日(土)・2月2日(土)・16日(土)
3月1日(土)・8日(土) 各日とも午後1時30分～(30分程度)
企画展担当学芸員が展示解説を行います。（要観覧券）

高知県立文学館開館10周年記念特別企画

清岡卓行 追悼展

11月2日(金)から12月19日(水)まで開催の「清岡卓行 追悼展」が、無事終了しました。ご両親が高知県の出身で、土佐を「血縁のふるさと」と呼んだ清岡さんの作品世界をご紹介し、詩人として作家として活躍された清岡さんの文学に迫る展覧会となりました。

初日には、ご遺族や関係者を招いてのオープニングセレモニーが行われました。夫人で作家である岩坂恵子さんのご挨拶、土佐女子高校2年依光ひとみさんによる清岡作品の朗読の後、テープにはさみが入れられました。

その後、ご子息の清岡秀哉さんによる展示解説が行われ、清岡さんが言葉の響きにこだわっていたというエピソードなどが披露されました。

11月3日(土)には、京都大学名誉教授・宇佐美斉さんによる記念講演会が行われ、清岡さんと宇佐美さんの出会いから、清岡さんの作品は詩を核として同心円状に展開される5つのジャンルがあること、清岡文学には「失われたもの」を想像の中で喚起しようとする特徴があることなど、清岡さんを直接知る方ならではのお話をいたしました。



▲ テープカットの様子



▲ 宇佐美斉さんの講演会の様子



(学芸課／津田加須子)

展示会場には清岡さんが所蔵されていたバッハが流れ、現代詩における戦後史の中で、重要な位置を占める多才な清岡さんの活躍が偲ばれます。清岡ファンがじっくりと時間をかけてご覧になる姿が印象的な展覧会となりました。

「ゼロ」から出発した資料収集は、18年度で4万3千点を超す蓄積となっています。しかも年々数千点単位で増加をみており、まさに郷土文学関係資料の一大集積となっています。

最近では、宮尾資料、宮地資料の一括寄贈という大きな成果もあり、作家や遺族、関係者の理解と信頼の賜と感謝しています。文学館の所蔵資料は県民の財産であるとともに、どう活かしていくかが大きな課題であり、その活かし方次第で文学館の存在価値が左右されると言つても言い過ぎではないのではないか、というようなことに思いを巡らすと、まさに先輩が、「命」とどうえたその思いが伝わってきます。今後の運営の中に所蔵資料をどう活かすか、心していかなければと思

「集める」から「活かす」へ
溝潤 良一
館長室から



館長になつた早々のころ、資料の寄贈に対するお礼の文言に「資料は館の命」という言葉に出会いました。行政に長く携わり、思いをおさえた文章に慣れた身には、「命」という文字がひときわ強く心に残つたことでした。

その後、元館長さんからの創立期の資料収集についての話や、寅彦関係資料の整理に携わった上田先生の話、高橋先生から孤蝶関係の資料の話を聞くにつけ、文学館の創立、整備に携わった先輩の方々の所蔵資料への強い思い入れをひしひしと感じたところです。

館長になつた早々のころ、資料の寄贈に対するお礼の文言に「資料は館の命」という言葉に出会いました。行政に長く携わり、思いをおさえた文

「噫無情」の黒岩涙香

—時代を読んだ新聞王—

猪野 瞳

戦後の小学校では、校長が名作を話しきかせることが多かった。授業に穴があくと、その穴埋めに校長が話を生徒をひきつけた。県東部では、それが黒岩涙香の「噫無情」だつたりした。

出身地ということもあったか。黒岩涙香がユゴーの「レ・ミゼラブル」を「噫無情」と題して「万朝報」に訳したのは明治三五年から三六年にかけてだった。その前年にはデュマの「モンテ・クリスト伯」を「巖窟王」の名で訳し、評判をさらっていた。むろん訳は筋とさわりを切り取つて訳す涙香流だったが、明治、大正、昭和と読みみがれた。「噫無情」を話す校長も昭和時代の愛読者だつたろう。

訳すについても黒岩涙香は、読者にいたしまる中味にする上で工夫をこらした。「噫無情」の登場人物には小雪、戎瓦戎、蛇兵太、手鳴田。黒岩涙香は安芸郡川北村前島に生まれた。大阪の英語学校から慶應義塾に移るが中退、その後「万朝報」を創刊、一大新聞に育て自由に筆をふるつた。各界各士の「善妾の実例」を連載し「まむしの周六」とも言われた。

日露戦争への気運のなかで「万朝報」は参戦論に転じ、堺枯川、幸徳秋水らに去られ評判を落としたが、新聞王といわれながら五八歳で死去した。「噫無情」「巖窟王」など世を湧かせた訳のほか多くの訳と小説を残した。

生家はいまも川北前島にあり、前を小川が流れ、少年時代に使った部屋は昔のまま保存されていて尋ねる人も多い。安芸市黒鳥の淨貞寺には黒岩直方、岡繁樹とともに「涙香新聞文壇の巨星黒岩周六」と刻んだ三人の共同碑が建っている。周六は本名である。



▲川北前島の生家の一部と浄貞寺の共同碑

といった日本名をあてた。小雪とはコゼット、

戎瓦戎はジャン・バルジャン、蛇兵太は蛇のような刑事ジャベル、手鳴田とは幼女小雪を喰いものにするテオドルである。

校長がかわいそうな小雪、それを救おうとする戎、いやな刑事蛇兵太、悪の手鳴田を中心と組立てる話は生徒をしんとさせたろう。脂のつた涙香の名訳だった。

「万朝報」には堺枯川、幸徳秋水らがいた。涙香は明治三四年、堺、幸徳らと理想団を結成し、社会主義への方向を語り、癌に冒され余命一年有半の宣告を受けた中江兆民を感じさせていた。社会正義をかかる黒岩涙香が「レ・ミゼラブル」を借りて社会正義、悪徳の告発を呼びかけてくるような「噫無情」だった。

黒岩涙香は安芸郡川北村前島に生まれた。大阪の英語学校から慶應義塾に移るが中退、その後「万朝報」を創刊、一大新聞に育て自由に筆をふるつた。各界各士の「善妾の実例」を連載し「まむしの周六」とも言われた。

日露戦争への気運のなかで「万朝報」は参戦論に転じ、堺枯川、幸徳秋水らに去られ評判を落としたが、新聞王といわれながら五八歳で死去した。「噫無情」「巖窟王」など世を湧かせた訳のほか多くの訳と小説を残した。

生家はいまも川北前島にあり、前を小川が流れ、少年時代に使った部屋は昔のまま保存されていて尋ねる人も多い。安芸市黒鳥の浄貞寺には黒岩直方、岡繁樹とともに「涙香新聞文壇の巨星黒岩周六」と刻んだ三人の共同碑が建っている。周六は本名である。

(詩人)

文学館で紹介している約40名の文学者を毎回2名取り上げ、展示資料のエピソードも交えご紹介します。下の実線部分を切り取って別に綴じてみてください。5年後には『常設展作家ミニ事典』となります。



北見 志保子（一八八五～一九五五）

きたみ しほこ

「平城山」の歌人、北見志保子（本名川島朝野）は、一八八五（明治十八）年一月九日、父・享一郎、母・勢津の長女として、幡多郡宿毛村（現・宿毛市）で生まれました。十四歳で父を亡くした志保子は、宿毛高等学校卒業後、代用教員としてわずか十五歳から働き出しました。この頃、はじめの夫となる橋田東声と出会ったとされ、退職し東京へ移住後、東声が東京帝国大学を卒業した一九一三年（大正二年）に結婚しました。

しかし、志保子より十二歳年下の浜忠次郎との出会いが、その後の運命を変えました。東声の弟子である忠次郎を知るのは、一九二〇（大正九）年。当時、慶應大学生だった忠次郎は、東声らが中心となつて創刊した「霸王樹」の編集を手伝うため、足繁く東声宅に通っていました。二人は互いに惹かれ合い、一九二二（大正十一）年、忠次郎が大学を卒業した年に三者で協議し、忠次郎は渡仏、東声と志保子は別離を決します。

となっています。

康

志保子の奈良滞在は、この年の夏秋と翌年の数ヶ月でした。

「平城山」は、この頃を回想したもので、万葉の情熱的な女性・磐之媛に触発された熱き想いが込められています。これは歌集『花のかげ』に収められ、歌集では他にも『月光』『珊瑚』などがあります。

古へもつまを恋ひつつ越えしとふ

平城山のみちに涙おとしぬ

当文学館では、平井康三郎によるこの歌色紙を、常設展示しています。

※「古へも」の歌は、北見志保子『歌集 花のかげ』から引用しています。平井康三郎の色紙はいじへも夫に恋ひつゝ越えしとふ那羅山の路に涙おとしぬ

三部作第一曲の二番詞

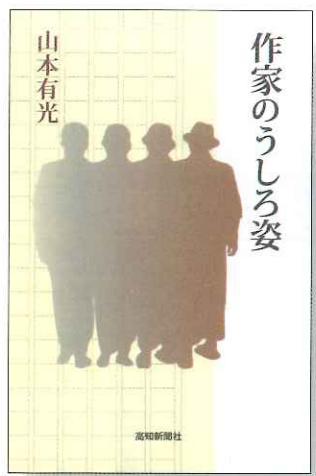
となっています。



資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—

【作家のうしろ姿】



山本有光著 高知新聞社
一〇〇七年十一月 B6版 二二六頁

受贈報告（平成十九年九月～十一月） 敬称略

▼吉田浩子・「美し」 吉田浩子著刊・岩崎勇監修

▼大手の浜なぎさの会・「いのちの海 大手の浜」
工コミュージアムを目指して 大手の浜なぎさの

会編 リープル出版 ▼市原麟一郎・「NHK民

話の玉手箱 おこうじぞう 市原麟一郎脚本・藤

本知子絵(紙芝居)他 ▼三浦良・「少国民の四

季 三浦良一著刊 ▼横田晴光・寺田寅彦覚書

山田一郎著 岩波書店他 ▼妻鳥季男・梅原

猛著作集第一巻(第二十巻 梅原猛著 集英社)

他 ▼竹本義明・天璋院篤姫 上・下 宮尾登美

子著 講談社 ▼豊島未来・「四国現代歌人選集

現代短歌を考える会編 ながらみ書房 ▼山本

有光・「作家のうしろ姿」 山本有光著 高知新聞

社 ▼高橋みゆき・「愛をありがとう」 高橋

みゆき著 飛鳥出版室他

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料

をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

著者の山本有光さんは一九三四(昭和九)年高岡郡越知町生まれ。中央大学国文学部卒業後「至文堂」「雑誌風景」「毎日新聞社」「舵社」などで編集者として長く仕事をしてきました。仕事柄多くの作家やこれに関わる人々と交わる機会があり、一般には窺い知ることの出来ない様々なエピソードを知ることが出来ました。その一端が著者の知見も交え「作家のうしろ姿」と題して昨年八月七日から五十回に亘り高知新聞に連載され興味深い文学的読み物として好評を得ました。この内容に若干の加筆・修正を行いました。このたびの出版となつたものです。

「雑誌風景」は、東京都内の大型書店五十店で組織された「懇々会」がお客様サービスのため料は一〇〇一年に当館にご寄贈をいただいています。

に発行した月刊の文芸誌で、一九六〇(昭和三五)年十月に創刊され十五年余り続きました。山本さんは一九六一年から十年余り編集長と二人でこの雑誌などで編集者として長く仕事をしてきました。仕事柄数多くの作家やこれに関わる人々と交わる機会があり、一般には窺い知ることの出来ない様々なエピソードを知ることが出来ました。その一端が著者の知見も交え「作家のうしろ姿」と題して昨年八月七日から五十回に亘り高知新聞に連載され興味深い文学的読み物として好評を得ました。この内容に若干の加筆・修正を行いました。

本書で一部紹介されている著名作家の生原稿や色紙、「雑誌風景」のバックナンバーなどの貴重な資料は一〇〇一年に当館にご寄贈をいただいています。

常設展虫ぬがね

橋田東声(一八八六～一九三〇)

はしだ

とうせい

われわれは心の不思議をもつ。

な位である。――

(『静夜歌話』序に代ふ)

と語っています。

以後は大学の講師などを歴任しながら、

作歌活動・著作活動を続け、現在まで続く

雑誌「霸王樹」を創刊したほか、代表歌集

『地壌』など、閑雅で清澄な名歌を多く残し、

近代短歌を代表する歌人となりました。

文学館の常設展では、自筆の原稿がご覧

いただけます。

一八八六(明治十九)年十二月二十日、

中村市(現・四万十市)に生まれた東声は、

鹿児島の第七高等学校に在学中、「明星」

の社友となり、雑誌などに短歌を投稿

しました。卒業後、上京して東京帝国

大学現・東大)に入学しますが、その頃

は短歌はほとんど創作しなかつたよう

です。しかし一九一五(大正四)年、

病床について斎藤茂吉の『赤光』

を読んだことがきっかけで作歌

を再開しました。のちに東声は、

一度、歌に興味をもち、作歌に

経験をもつたものは容易に之れ

から離れない。しばらく離れてゐても

又候戻つて来る。それは、全く、不思議



▲「生命の詩歌」原稿

12

イベント紹介

……最近開催された催事をご紹介します。……



10月21日(日)に「語りと紙芝居の会 北と南の民話 語りくらべ」が開催され、海外でも幅広く活躍している福島県在住の語り部・横山幸子さんと、高知を代表する語り部・市原麟一郎さんによる民話の語りが披露されました。

福島では、囲炉裏を囲んでじっくり語られる本格昔話が多く、横山さんは「羽衣伝説」などを情感たっぷりに語ってくれました。一方、南国・土佐では、立ち話でするような明るい小話が多く生まれ、市原さんは色々な土佐の「あどけ者」が活躍する話をコミカルにテンポよく語ってくれました。

最後には横山さんによる「語りのコツ」も聴け、「お国ことばの違いが面白かった」、「これからもこんなイベントを開催してほしい!」など、大勢のお客様に喜んでいただけました。(学芸課/島田・福富)



▲会場の様子



審査結果は以下のとおりです。(敬称略)

金賞	高知市立江ノ口小学校2年	黒原史織
特別賞・有川浩賞	津野町立白石小学校3年	清藤葵
郷土文学賞	高知市立潮江中学校3年	藤崎安由美
銀賞	津野町立白石小学校2年	下元里佳子
	土佐女子中学校3年	佐藤友美
銅賞	高知市立小高坂小学校3年	村山真理子
	津野町立中央小学校6年	高橋小春子
	高知市立三里小学校6年	常光美帆
	高知大学教育学部附属中学校3年	池添董
	土佐女子中学校3年	佐竹汐莉

その他、11名の方が入賞されました。

▼コンクールでの記念撮影と
サイン会の様子



さんが、ライトノベルや読書についての思いを話されました。コンクール終了後に行われたサイン会にも多くのファンが集まり、人気作家と直にふれあう事のできる貴重な機会となりました。

(学芸課/間城彩佳)

日時：平成19年11月～平成20年3月 毎月第4土曜日
午後2時～3時半まで

場所：高知県立文学館 1階文学館ホール

講師：高橋 正（元徳島文理大学教授）

講座内容：第1回(11月24日)「中江兆民と幸徳秋水」
終了しました
第2回(12月22日)「黒岩涙香と万朝報」
終了しました
第3回(1月26日)「森下雨村と探偵小説」
第4回(2月23日)「小山いと子と倉橋由美子」
第5回(3月22日)「大原富枝」



民話は大事な宝物！
南北語り部の競演！



朗読コンクールは今年で
10回目を迎えました！

昨年11月、高知県立文学館は開館10周年を迎きました。それを機に、幅広い年齢層へ向けての、よりわかりやすく、掘り下げた展示をめざして、常設展示室をリニューアルいたしました。「土佐の文学を極める～常設展文学散歩」では、高橋正先生（元徳島文理大学教授）を講師にお迎えし、常設展および土佐の文学の魅力をお届けしています。（全5回）

当日参加も可能ですので、ぜひ文学館へお立ち寄りください。（学芸課/津田・森）

土佐の文学を極めよう！
大好評の文学力レッジ！

企画展 案内

「天璋院篤姫と宮尾文学」展

平成20年 1月2日(水)～
3月9日(日)まで

- ◆会場／高知県立文学館 2F企画展示室
- ◆観覧料／一般550円(常設展含む) (※会期中 休館日なし)
- ◆開館時間／午前9時～午後5時 (入館は午後4時半まで)

直木賞作家で、現在多くのファンを魅了し続けている郷土出身の作家宮尾登美子さん。

高知県立文学館では、宮尾さんより寄贈いただいた『天璋院篤姫』の直筆原稿などを中心に、宮尾文学の世界をご紹介。宮尾さんが描く「篤姫」の魅力にせまります。

NHK大河ドラマ「篤姫」時代考証担当者 来高！ 講演会開催

関連企画

開催日：平成20年2月3日(日) 午後2時～3時30分

場所：文学館1階ホール 定員：100名

演題：「篤姫の生き方—土佐と薩摩」

講師：原口泉氏(現在、鹿児島大学生涯学習教育センター長、

鹿児島大学法文学部教授、NHK大河ドラマ「翔ぶが如く」

「琉球の風」などの時代考証もなさっています。

参加料：当日観覧券が必要です。(但し、2割引)(事前に電話でお申し込みください)



その他、「土佐弁かるた大会」や「投扇あそび」など、江戸時代の遊びを体験できる楽しいイベントを予定しています！ 詳細は2・3ページをご覧ください。

イベント 案内

みんなあつまれ！

高知県立文学館

おはなしキャラバン

毎月第1土曜日開催中！

文学館では、新しく出来た「子どものぶんがく室」で、毎月第1土曜日に、楽しいおはなし会を開催しています!!

土佐の民話を中心にした紙芝居・読み聞かせ・クイズなどで、楽しい時間を過ごしませんか？

学校への出前公演なども受付中です!!



場所：文学館1階 みんなあつまれ！

子どものぶんがく室

時間：午後2時～(30分ていど)

入場：無料

みんなくるのじゃ★

朗読フェスティバル

高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しんでいただこうと、「朗読フェスティバル2008」を開催いたします。

ゲスト：山本一力 氏

※朗読フェスティバルの中で講演も予定しています！ 詳細はお問い合わせください。



2/16(土) 開催!!

場所：文学館1階ホール

時間：午前10時～午後4時(予定)

入場：無料

県下11組による、朗読の競演！

どなたでもお気軽に
お越しください！



利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

一般350円

特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

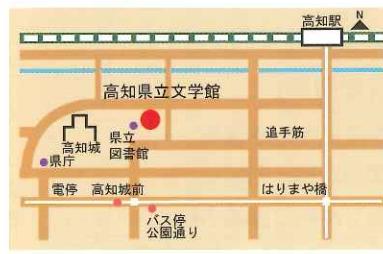
なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
ホール、ミュージアムショップ、閲覧室、茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

交通のご案内



- 高知駅空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857